法人設立記念フォーラム

妊娠期から子育て・高齢者をつなぐフォーラム
ソーシャルキャピタルの醸成

多世代包括的なサポートや地域づくりについて、一人ひとりができること

事業報告集

平成 29 年度京都府
地域力再生プロジェクト
支援事業交付金事業

特定非営利活動法人 はぐラボ

ご挨拶

地域ではぐくむ「0歳から100歳超えてもずっと応援」～つながる・働く・生きる～。そのために、わたしたちには何ができるのでしょうか？

社会の変化が大きい中、人々のつながり方、働き方、生き方にも変化が起こり、生きづらさを感じている人は少なからずあると思います。これまで、子育て、高齢者、障がい者など、それぞれの分野で制度が充実し様々な取り組みが行われてきました。それぞれに改善され環境はよくなったと思います。これからは、世代や分野をごちゃまぜにしていくことで化学反応が起こり、さらに暮らしやすい地域づくりができるのではないかと考えております。

そこで、多世代包括的なサポートや地域づくりについて一人ひとりができることを考える機会として、法人設立記念フォーラム「妊娠期から子育て・高齢者をつなぐフォーラムPart I　ソーシャルキャピタルの醸成」を開催いたしました。当日は、行政、NPO、企業など様々な立場、また、子育て支援、母子保健、高齢者福祉など様々な分野の方々に多数ご参加いただきましたこと深く感謝しております。

参加された方からは、「新しいつながりができた」、「気づきがあった」との感想をいただきました。また、その後、実際に行動を起こしてくださったとの報告もいただき、大変嬉しく思っております。

報告集には、社会課題とはどういうものか、社会課題に取り組むために大事なことは何か、さらに、現場の具体的な実践をまとめました。手に取っていただいたみなさんの中に新しい芽が生まれ、今後の取り組みに役立てていただけますと幸いです。

平成30年3月吉日

団体紹介

特定非営利活動法人はぐラボ

地域ではぐくむ
「0歳から100歳超えてもずっと応援」
～つながる・働く・生きる～

☆子どもをはぐくむ！人をはぐくむ！地域をはぐくむ！ みんなでラボしましょう！☆

はぐラボは、世代や分野を問わず、
地域で暮らす人たちと行政・企業・団体をつなぎ、
仕事や生きがいを生み出す仕組みづくり、
またそれに関わる人々を応援していこうと
京都亀岡で活動している団体です。

■ 事業内容
・子育て等に関する相談、支援事業
・人や地域をつなぐネットワークづくり事業
・包括的な地域福祉に関する調査、研究、資源開発、政策提言事業

Hagulabo

プログラム

13:30　開会挨拶

13:35〜14:35

Ⅰ.　基調講演

共創を生み出すオープンイノベーションプラットフォーム

西村 勇哉（にしむら ゆうや）さん　特定非営利活動法人ミラツク　代表理事
大阪大学大学院国際公共政策研究科　招聘教員

14:40〜15:25

Ⅱ.　実践報告

藤田 大子（ふじた はるこ）さん　株式会社藤大 代表取締役

子育てや介護をしながらの「女性の働く」を応援

広田（ひろた） ゆかりさん　特定非営利活動法人グローアップ 副理事長

世代をつなげて、地域みんなで子育て

荒牧（あらまき） 敦子（あつこ）さん　特定非営利活動法人クローバー・サービス 理事長

「地域で暮らし続ける」を支える

15:25〜

Ⅲ.　ソーシャルキャピタルトーク

多様な職種の方と各テーブルにて意見交換・交流

16:25　閉会挨拶

基調講演

共創を生み出すオープンイノベーションプラットフォーム

西村 勇哉（にしむら ゆうや） 氏

特定非営利活動法人ミラツク　代表理事
大阪大学大学院国際公共政策研究科　招聘教員

特定非営利活動法人ミラツク
「既にある未来の可能性を実現する」をテーマに異なる立場の人たちが加わる、全国横断型のセクターを超えたソーシャルイノベーションプラットフォームを構築。現場起点の調査プロジェクトを中心とした企業の新規事業開発や未来戦略の開発に取り組む。

働き方

- 出勤しない
- 勤務場所と勤務時間は自分で決める
- 年に1回1か月現場から離れる+渡航費補助（どこでも行ける）
- 月に1回オフィスに集まる（全員来る）
- 年に3回3日間の通勤合宿（全員来る）
- 外部組織からの部分出向の受け入れ

どうすれば使える時間が違ったり、働き方が違ったりしても一緒に働けるのかを考えながら運営している。

■チェックイン

テーブルごとに自己紹介（名前・どこからいらっしゃったか、普段されていること、今回参加した関心や経緯など1人1分ぐらい）

■はじめに

ソーシャルキャピタルの醸成はとても大切なテーマだと思っている。子育てを子育てをする人だけがやるのではなく、高齢者のことを高齢者に関心がある人だけでするのではなく、それではもう手が足りない状況の中でどうやって、お互いが、でも負担なくお互いをサポートし合えるのか。
人のつながりがないのに協力しようというのは難しい。そのつながりを作るのがソーシャルキャピタル。社会課題とはなにか、ソーシャルキャピタルを醸成していくにはどのようにしていくのかを考えたい。

■社会課題

なぜ、多くの人が取り組むのに課題は解決しないのか？ ▶ **新しい解決法が必要なのかもしれない**

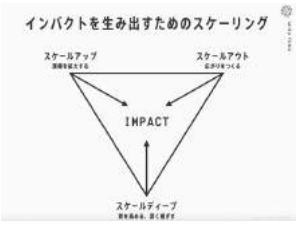
・社会課題を捉える基本的視点

社会課題とは、予見しきれていなかった負の外部性（副作用）によって起こるギャップ・困難
社会課題が起こった状況に対して、元の状況に戻すのではなく、課題を解消した進化に取り組む
社会課題の完璧な解決や、社会課題が無くなることは、（ほぼ）あり得ない

■ソーシャルイノベーションを支える2つの視点

・インパクトを生み出すためのスケーリング

- スケールアップ　規模を拡大する
- スケールアウト　広がりをつくる
- スケールディープ　質を高める、深く根ざす やって意味があることをしていく



1人暮らしの高齢者

2005年から2030年への単身高齢者変化
386.5万人（男性105.1万人、女性281.4万人）→ 717.3万人（男性278.4万人、女性438.9万人）
未婚化：未婚 78万人 → 288万人　　高齢化：死別　　少子化：こどもがいない　　核家族化：こどもの別居

事例：高齢者の「孤立への対応」

スーパーが「シニア向け」に次々とシフト：少量総菜パック、軽いカート
1人暮らしの高齢者が何に困っているのか、その実態をどのくらい考えられることが大事

↓

現場のインサイト

1人暮らしの高齢者の話を聞くと漠然とした「孤立感」があらわれてきた。友人はいるが会えない、活動的だが日常的な友人がいない、など。一緒にご飯を食べる人がいない「孤立感」

↓

事例：高齢者の「孤立の解消」

高齢者と学生をマッチングする　部屋単位の下宿
1週間のうち何回か一緒にご飯を食べる。食べる相手がいる、作る相手がいることで、孤立感を少し解消できる。それは少しのことだけど、日々孤立感が続く中での少しなのか、日々解消するのが少しなのかによって結果が変わってくる。
全戸をテレビ電話でつなぐ→高齢化率100%の集落
日々の生活の中に会話を生む

現場で起きていることを起点として何ができるのかを考えるのかが大事な視点。それぞれが持っている視点は違う。それを合わせ協力することで生まれてくる視点があることが価値である

・イノベーションの成長プロセス

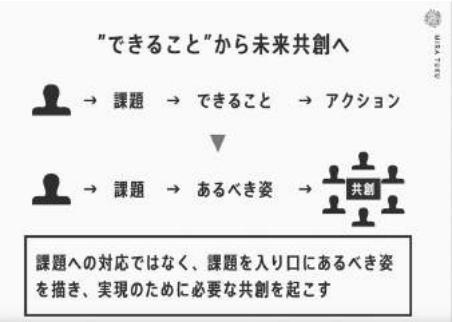
【ひとつの取り組みがどのように発展していくのかというプロセス】

1.Prompts 思い付き ▶ 2.Proposals 提案 ▶ 3.Prototypes やってみよう ▶ 4.Sustaining 維持する ▶ 5.Scaling 広げていく ▶ 6.Systemic change 広がって意味がある

郵便のイノベーション

ローランド・ヒル（1795－1879）学校の先生　教え子が都会に行くがその後がわからない
「前払い」の切手制度の創設
あらゆる人に平等な料金を実現
郵便料金は1/15以下の1通1ペニーを実現 → 翌年の郵便利用者は2倍に増加
1854年までに30か国に広がる（日本は1873年）
＊日本の郵便事業（はがき、切手）の現状　　2014年度：1兆8,000億円（181置く8,863通）

課題を見て本当はどうなったらいいんだろうを考える、
実現するために必要な仲間を探してくる、必要なものを見つけてくる、
結果、違うものを生み出すということをするとイノベーションが生まれてくる。
必要なものを探してくるのが共創



・"できること"から未来共創へ

課題への対応ではなく、課題を入り口にあるべき姿を描き、
実現のために必要な共創を起こす

■共創を生み出すエコシステムのデザイン

・ソーシャルキャピタルの醸成

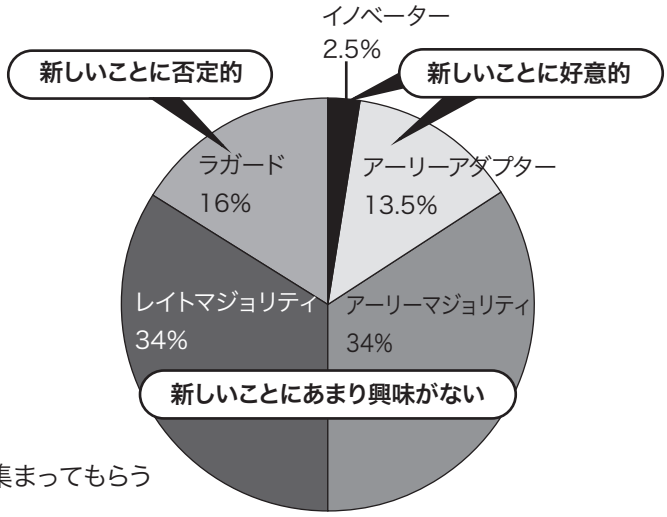
ソーシャルキャピタル（人のつながり）には質がある
ソーシャルキャピタルの質は「温度」のようなもの
温度を上げるための方法と共創のデザイン

・コミュニケーションのデザイン

対話に至るステップと4つの話し合い

STEP1　情報の交換　Conversation
↓ OPEN　MIND
STEP2　意見の交換　Discussion
↓ OPEN　HEART
STEP3　感覚の共有　Reflective　Dialog
↓ OPEN　WILL
STEP4　意思の共有　Generative　Dialog
（ウィリアム・アイザックス）

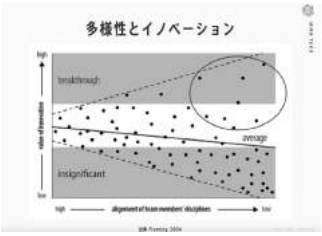
・イノベーターの分布



やってはいけないことは、なるべくたくさんの人を集める。
何か新しいことを始める時は、新しいことに興味がある人に集まってもらう

・多様性とイノベーション

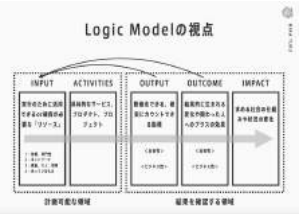
いろんなアイデアが出てきた時に多数決をとると確実に見失うものがあり、つまらなくなる。一つしかないが面白いもの、いいものを選んでいく



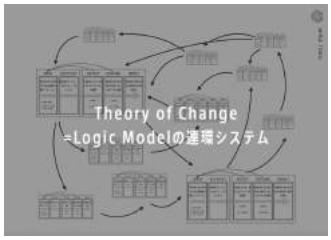
■エコシステムと取り組みの連関

・Logic　Modelの視点

「具体的に取り組めるサービス・商品・プロジェクト」がどのような成果を生み出すのかを、短期、中期、長期で仮説立て、事業の軸や方向性を見える化するための方法



・Theory of Change = Logic Modelの連環システム



・エコシステム

ある取り組みの成果が、他の取り組みのリソースになるような、相互に循環している状態
例：子育てのための取り組みが、結果的に高齢者のための取り組みにつながる。高齢者のための取り組みが、地域づくりの取り組みにつながる。
「自分たちのやりたいことであり、誰か他の人にためにもなる」取り組みのあり方

ソーシャルキャピタルの共創

1：社会課題は常に発生し、その度に新たな構想と取り組みが求められる
2：新たな構想は、現場視点と目指す未来像から生まれる
3：新たな取り組みや取り組みを支えるチームは、ソーシャルキャピタルの基盤の上に生まれる

ソーシャルキャピタルを醸成するための鍵は

ソーシャルキャピタルは一番ベースになるもの　「pay it forward（まず先にあげる）」
先にあげる人がいるととても楽、一番先にあげてくれている人たちがソーシャルキャピタルを積極的に作ってくれている人たち。その人たちは異端になってしまうので、とても苦しい戦いになってしまい地域全体が苦しい戦いになってしまう。先にあげてくれてつながりを作ってくれているだけだけど、先にふれていることを大事にしてあげると、地域全体の改革が楽になってくる。

地域であっても社会であってもいろんな背景を持っている人がたくさんいる。
その多様な視点を大切につながっていくことが大切だと考える。

実践報告

◎子育てや介護をしながらの「女性の働く」を応援

ふじた　はるこ
藤田 大子 氏　　株式会社 藤大（ふじはる） 代表取締役

株式会社藤大
所 在 地：亀岡市薙田野町
事業内容：電子部品外観検査・産業機器端末加工・組立
2007年加工グループを立ち上げるまでは従業員は100%女性、
現在、社員約90名のうち80%が女性

女性の雇用

女性が家庭と子どものある主婦が仕事を持つというのは、それなりの覚悟と労力が必要だと私はいつも思っている。仕事を後回しにして主婦や母親という立場を前面に出すと職場での責任がなかなか持てなくなる。かといって、家庭と子育てを後回しにすると仕事を続けていくことができない状況になってくると思う。このことを、弊社はしっかりと認識をして理解をしなければと思っている。

お客様の要望に応えるためみんなで協力

インフルエンザのシーズンになると子どもや本人が感染をして1週間～2週間という長期の休みになることがある。学校や保育園では、運動会や参観など、いろんな行事がある。そういうシーズンになると会社は開店休業状態になる。しかし、会社は取引先に従業員が休みだから納品できないとは言えない。学校行事、地域行事を含めて行事が重なる時は、前もってお客様からは納品計画をいただいているので、その日に出勤できるパートさんの出来高を計算して、前倒しをして前日までに仕上げるようにしてもらっている。学年が違うと出勤時間がまちまちになるが、みんなで協力し合って、お客様の要望に応えられるようにみんなで協力している。

女性が仕事を持つということ

パートさんを採用する時に最初にお話をするのは、「女性が仕事を持つということは1社会人としての職場に対しての責任が出てきますよね。私はパートなんで、いや、主婦、母親、そういう立場を最優先するのはやめてください。社会人として職場を意識的に意識の上では最優先していただきたい。そうでないと、女性が多い職場というのは、それぞれが母親であり主婦であるという立場を優先されると、職場は成り立っていかない。そこのところを、まずご理解いただきたい。そして、どうしても必要な時間、その時だけ、用事のある時だけ抜けてください。その後は職場に帰ってきてください。職場に対しての責任を持ってもらいたい。」面接の時に一番最初に話をしている。そうすると、子どもが病気で早退しても、次の日には子どもが寝ている1時間だけでも出勤してくれる従業員もいて、現場の大変さをわかってくれている。1人ひとり責任を持つことで、自分自身の存在感、価値観を自分で感じて持っている。そういう人たちの集まっている職場にしてきてくれている。私自身の誇りにもなっている。休日、どうしても出勤してもらうことがある。その時は、子どものスペースを設けていて、子どもたちも仲良く遊んでいる。毎年、恒例のバーベキューなどでもお互いに親睦を深めていっている。

従業員の成長が会社の成長へ

私自身の子育ては父親に助けてもらった。でも、それだけではなかなかやっていけない。ご近所の友だちに保育園の迎え、食事を食べさせてもらい、お風呂に入れてもらい、もう帰って寝るだけでいうという状態にしてもらって、本当に周りの人にたくさん助けてもらった。おかげで子育てをしながらこの仕事をやってこれた。なので、職場優先にとは言っているが、何かあった時は、家庭を最優先に帰ってもらっている。でも、また職場のことを意識して職場のことを最優先に考えてくださっている。この藤大は、お互いが融通しあって、お互いのことを理解しあって、1人ひとりの存在感と価値観をしっかりと持ってもらって出来上がってる。もっともっと女性が働きやすい職場にしてきたいと1経営者として思っている。藤大は内職から立ち上げてきた会社である。人がすべてと考えて人を大切にして考えてきた。時には悲しみを一緒に乗り越えてきた。自分自身が成長してもらっていることが、会社の成長につながっている。従業員が会社がともに明るく元気に職場環境を全員参加で作っていける会社でありたい。みんながみんなの幸せを追求していける会社であるように、これからも目指していきたいと思っている。それには地域のみなさまのご協力も必要であり、みなさまと共に課題（子育てや介護等）解決に向けて、取り組んでいけたらと思っている。

◎世代をつなげて、地域みんなで子育て

広田（ひろた） ゆかり 氏　特定非営利活動法人グローアップ 副理事長

特定非営利活動法人グローアップ
メンバーは全員女性。女性、子育て中だからこその視点で地域とつながる・つなげる
この地域でいきていくためにも働く場を作りたい。
結婚して子どもを産む、転居、離職が重なると地域とのつながりが一旦切れてしまう。
だからこそ、この地域で生きるために「つながる」を大切に
大人のイキイキとした自ら楽しむ姿や姿勢がふるさとを作り、子どもたちへの未来や希望へつながっていく。

子育て支援を切り口にまちづくり ――――
私たちの取り組み方、事業の広がり方が何かのヒントとなればと思っています。

「〇〇のママ、〇〇の若嫁さん」ではなく、
「私を」を主語に安心して本音でしゃべりたい
みんなで学んだら子育ての「共通語」ができるよね
子育てに関しても学びたい

▶ **自分たちだけで聞きに行くのではなく、来てもらって講演会やろう！** ▶ **講演会は参加者80名の大成功**

大人も子どもも一緒に成長していけるように
「グローアップ」と命名（2008年）

その後、定期的に安心・安全に本音で話せる場を開催、子どもを遊ばせてママ友ができて学べる場を提供してきた。
「こんなのがあったらいいよね～」、「他ではあるらしいよ」と他の町で住んだことがある人から「なんで、ここにはないの？」
どうやったら、できるんだろうね～？

★そんな時、神の一言が その❶

「子育てのひろばやらない？」（2010年）
ノウハウもお金もすべて提供するよ（特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワーク吉田さん）
南丹市子育て支援課に相談して、八木保健センターを借りて開催することになった

★そんな時、神の一言が その❷

「法人格を取得してもらえませんか？」（南丹市、2011年）
なぜ、その組織に委託をしたのか説明しやすいように
2011年6月～　子育てつどいの広場
南丹市から委託事業へ　2012年4月17日法人格取得

■「点」を「面」でつなごう！

●子育てひろば「ぽこぽこくらぶ」　時間10時～15時（美山のみ15時30分まで）
八木　毎週　月、火、水、金
日吉　毎週　火
美山　毎週　木
園部　毎週　木

●Seedbase シードベース
（2015年6月～）
こどもたちが自由に遊べる空間、
地域の人も自由に集える空間

●南丹じかん 地域をつなぐ情報誌（2014年9月創刊）
子育てひろば「ぽこぽこくらぶ」を各町で行うようになり、
他町のことを知らない人が多いことに驚く。それぞれで
頑張っている人、もの、コト、などの点を面でつなげたい。
人に焦点をあてた情報誌

「家に帰ってもひとりやねん」
「今日はひとりでごはん食べるねん」
ひろば開催は公共施設、拠点となる民家が借りられたら、
みんなでごはんを作って食べる日をやろう！
どこかいい民家ないかな？

★そんな時、神の一言が その❸

『この家　使ってええで』（2015年10月）
南丹市空き家活用助成金を使って改装
コミュニティスペース　気になる木　ＪＵＪＵ
（2016年4月オープン）

●みんなでごはん！

地域の中で活動したい人が視察にこられるが、
ベースになる場所がないという声があります。
地域の中で活動したい人にチャンスが与えられるように
考えてほしいと思います。

◎「地域で暮らし続ける」を支える

あら　まき　あつ　こ
荒牧 敦子 氏　特定非営利活動法人クローバー・サービス 理事長

特定非営利活動法人クローバー・サービス
1998年立ち上げ、来年20周年を迎える。
2000年から介護保険事業を開始し、受託に伴い法人格を取得した。
最初は仕事がなく、依頼があれば草刈りなどもしていた。
事業内容：高齢者福祉、障がい者事業、認知症相談室、子どもの見守り（緊急の場合）
●助け合いからの出発
元社会福祉協議会に務めていた人が中心になって始めた。
地域の制度や公的なサービスにのらない困りごとに対応。

外出支援

「福祉有償運送」、助け合い有償運送

クラブ活動

ヘルパーさんが中心になって、自分の得意分野のことをしている。気功・絵手紙・コンサート 等

介護保険事業　**（2000年～）**

訪問介護・介護予防訪問介。住み慣れたご自宅での生活が続けられるよう、サービスを提供している

地域密着型通所介護・介護予防通所介護

定員15人の小さなデイサービス。
日曜日開所が人気。利用者を交えて内容を考えている
働くヘルパーさんも自分が提供できる時間で
働けるようにしている（週1回から）

みんな、おいデイ

行政からの委託を受け、公民館などで予防事業を実施。
行政の条件の範囲内ではしばりがある
軽体操・ゲーム・手芸・囲碁・健康マージャン・ゲーム 等
お昼ご飯とおやつは手作り　必要に応じて送迎をしている

居宅介護支援

利用者の心身の状態を把握・本人ご家族の相談に耳を傾け、
主治医やほかの事業所との連携して、ケアプランを作成。

クローバーカフェ（認知症カフェ）

運営費がなく持ち出しの事業だが、利用者が増えていて続けている。
事業所からすぐ近くの空き家で開催している
100歳の人も利用　第1月曜日は認知症の話
コンサート（2か月に1回）空き家にあったピアノを使っている。
（ヘルパーの中にピアノを教えている人がいて、職員の特技などを活用している。）

認知症わいわいクラブ

始めたきっかけは、ある一人の女性がアルツハイマー病になり、どうしようかと考えてできることはカフェだということで始めた。それから発展して地域の中の居場所になった。
マージャンは介護予防の通所者が教えている。参加者は高齢になってからマージャンを始めていて、それからのめり込んでいる。高齢者にわくわくした楽しみを持ってもらうことが大切だと感じている。
ひきこもっていた青年が働いている。ヘルパーさんがおばあちゃんのサービスで自宅を訪問した時に子どもさんがひきこもっているようだとわかった。家族から「なんとかならないだろうか」と言われカフェを働くようになった。
その後、ヘルパー2級を取得し社会福祉法人に採用試験を受けるが試用期間が終わると断られる。ひきこもっていたことで社会性がない、人の顔色を読んで自分の動きをすることができない。そうすると対人援助の現場では相手が何をしてほしいのかがわからないと気働きができない。忙しい介護現場では、なかなか受け入れられないので、カフェで働いてもらっている。彼自身の個性で働いていて、利用者の高齢者からは孫のように親しまれている。実際は、朝起きられないこともあるが、ひとつ約束をしているのは「朝、牛乳1本でもお腹に入れておいで。何も食べないで来るのはだめ。」それができるのならここで働いたらいい。今はゆるい関係が合っているのだと思う。クローバー祭りでは先頭をきって歌をうたっている。彼のできる範囲で十分スキルを活かせるようにしている。ゆるい関係で地域の中で働けるのがNPO法人の在り方かと思っている。彼の実態を親御さんに理解をしてもらえるよう、意思疎通をしている。彼のお母さんもカフェで働くようになり、息子のことが理解できるようになった。
カフェは事業として収益はあがらないが、ゆるい関係でいろんなものを包括してやっていけるのでやってよかったと思っている。参加者からはコーヒー100円いただいていたが、1000円でもええよと言ってもらったが、今は200円にしている。月に1回昼食会をしている。参加者が持ってきた食材で一緒に料理を作って食べる。そうすると、また利用者が増えてきた。

◆ソーシャルキャピタルトーク

日ごろは障がい者福祉から地域づくりを考えていこうということで日々取り組みをしている。今日は、いろんな視点、また考え方を聞かせていただいて大変勉強になったなと思っている。

民間と行政との歩み寄りが必要だ、人と人のつながりが大事だという話が出た。行政からはどのように歩み寄れているのか、また民間の方では何ができるのかという話をした。今、行政ではいろんな事業を立ち上げていく中で民間の人の声を聞かないといけないという姿勢はすごく意識し出していると感じている。しかし、実際に企画をする段階で担当者の力量が伴っていなくて、どう進めていけばいいのかわからず悩んでいるのが現状である。民間は比較的、経験を積んでいるが、それを行政がすぐに取り上げるというのではなく、まずは実績を積んで形を作り上げたものを行政に提示することで、認めてもらえるというような実績を重ねてきたという話があった。

内容の濃いフォーラムだった。子育て支援や高齢者福祉に関わっている人たちで話をした。したいことがあるけれど、人手や資金的な問題があるが、お互いNPO同士でネットワークを広げることでできることがあると気づかせてもらった。
多くのNPOや行政が課題に取り組んでいてもなかなか解決できないが、横のつながりや縦のつながりを作れる場があるとできることがある。このような場は必要だと思うので、今後もこういう機会を作ってほしい。

◆まとめ（吉田秀子さん 特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワーク事務局長）

● 基調講演から

西村さんならではのお話だった。多くの人が取りくんでいるけれど課題はなくならない。準備をしていないからと言われた。今の現状を元に戻すのではなく作り出していく。一人ひとりが元気を取り戻していくこと。特に忘れがちなことは、それで「社会」は「その人」は「そのこと」は変わるのかという点。どうしても支援者の視点で動きがち、動かざるを得ない状態になりがちだが、その人がこれをしてどう変わっていくのかという視点が必要だ。そのためにはコミュニケーションが大事。

●藤田さんから

女性が職業生活と家庭生活を大切にしながら、なおかつ、企業として成長していくために様々な工夫をされている。
特に面接時の「仕事をするには責任が伴う」この言葉はしっかりと社員に伝わって、企業の成長につながっている。

●広田さんから

子どもを遊ばせながら話し合っていたのは、「ここに、なんで子どもを遊ばせながら話せる場がないんやろう」。当事者だからこそわかる新しいニーズだった。この思いから生まれた活動が南丹市の中で子育てひろばを広げていった。
行政の方にもしっかりと提言され、いろんな地域資源を活かして活動を広げていき、地域とつながりながらNPO活動をされている。

●荒牧さんから

基調講演からつながる貴重な話をいただけた。
ひきこもりの若者のことでは、ケアマネジャーさんがおばあちゃんのことで自宅を訪問し、その家族にひきこもりの若者がいることを発見した。通常なら担当する分野が異なるので、若者支援につながらないが、その若者が資格を取ることにつながり、面接でうまくいかないときには、じゃあ、ここで働いてもらおうという話になった。介護保険の利用者だけでなくその家庭の若者の心配までされている。
このような話を聞いて思い出したことがある。厚生労働者の今日的課題という資料に、世帯の中の1人に複数の課題がある、1人だけではなく家族にも課題がある、だから1人の一つの課題だけに対応するだけではなく、包括的な支援、つまり世帯全員の課題に対応するような支援が必要であろうというような内容だった。
このフォーラムのテーマのように、多様な世代への包括的な支援が必要とされ、また、西村講師の言葉にあるようにその支援によってその人がどのように変わったのかという視点を持った支援が必要だ。

PRコーナー

社会福祉法人倣襄会「あゆみ安心サポート」

京都丹波地域つぎの展開プロジェクトチーム

京都府地域力ビジネス課「花咲かウーマンプロジェクト」

かめまる子ども食堂

亀岡市地域包括支援センター
（亀岡市健康福祉部高齢福祉課）

一般社団法人育ちとつながりの家 ちとせ

亀岡市子育て世代包括支援センターBCome（亀岡市こども未来課）
特定非営利活動法人はぐラボ

京都府南丹保健所

PRコーナー

社会福祉法人 友愛会

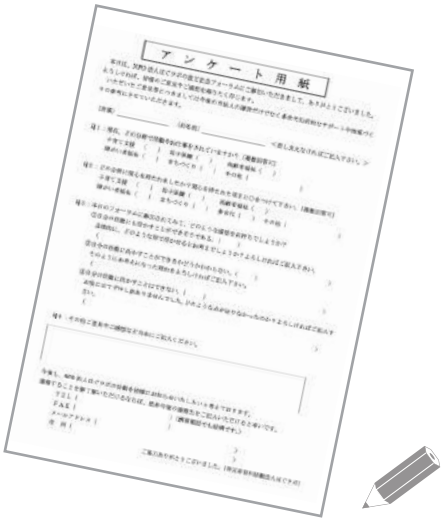
特定非営利活動法人グローアップ

かめおか子ども新聞

特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワーク

株式会社あしだ建設
京都中小企業家同友会
一般社団法人コスモス成年後見サポートセンター

アンケート集計



■アンケート集計　有効回答数　47

Q1：現在、どの分野で活動やお仕事をされていますか？（複数回答可）

子育て支援 21人　母子保健 11人　高齢者福祉 13人　障がい者福祉 9人　まちづくり 16人　その他 11人

・様々な人と色々な話をする場つくり　・社会福祉　・出版　・多世代交流他　・成人健康づくり
・ひきこもり　・男女共同参画　・若者支援　・健康管理
・こども食堂(地域の子供、高齢者みんな一緒にごはんを食べる)

Q2：どの分野に関心を持たれましたか？関心を持たれた項目に〇をつけて下さい。（複数回答可）

子育て支援 28人　母子保健 14人　高齢者福祉 12人　障がい者福祉 7人　まちづくり 27人
多世代 31人　その他 3人

・ソーシャルキャピタル　・若者支援　・女性の生き方、男女共同参画の視点

Q3：本日のフォーラムに参加されてみて、どのような感想をお持ちでしょうか？

①自分の活動にも活かすことができそうである。　・・・42人

具体的に、どのような形で活かせるとお考えでしょうか？よろしければご記入下さい。（抜粋）
・主催事業を通じて、テーマとしてとりあげ、市民への情報提供、交流
・人と人がつながり協力が生まれ、活動することで、さらに活動が生まれていく、このサイクルを地域福祉に活かしたい
・まず、知って頂くこと、関係作りを行うこと、カフェの運営
・多分野、多職種の方とのつながる、つながった人と創り出すという視点を日常の仕事の中でもちながら仕事していきたい
・事業をしていく中に多数決ではなく面白い、かわってるけどイイかもを取り入れることに着眼したい
・立場の違う人とのつながり、アイディアをいただけると思う
・問題解決に対する考え方
・現在抱えている事業を分け合える可能性が考えられた。助け助けられ共にすべてが回っていければ良い
・広くつながることの大切さを再認識、実行したいと思います
・様々な地域の色々な活動されている団体等とつながりを持つ
・多世代が集まれる居場所からのまちづくり
・“家庭の太陽＝お母さん”のあったらいいなを形にして癒して又、家庭で職場で輝いてもらう

②自分の活動に活かすことができるかどうかわからない。　・・・3人

そのようにお考えになった理由をよろしければご記入下さい。
・クリエイティブな活動をつなげて作りあげて継続するむずかしさを常々感じている
・活動に生かせるかどうかはわかりませんがいろいろな話を聞かせていただき参考になりました

③自分の活動に活かすことはできない。　・・・0人

Q4：その他ご意見やご感想など自由にご記入ください。（抜粋）

・報告者の力強い実績にはげまされました。各分野がつながることの大切さをあらためてまなびました。
企画ありがとうございました。

・荒牧さんのお話は、私達の目指しているものと重なる所は多々ありますが、法人格を取得して本格的な事業としてされていますね。地域を活性化するという目的はとても参考になりました。1つの事業をするというのは次々つながって行く事になり未来が広がりますね。

・改めて民の力（NPO等）+ 公の力（行政）の質が1人の人をそして地域をよりよいものに変えると思った。

・多世代のまちづくりを検討しているため、とてもためになるお話を聞くことができました。

・講師の方の資料、とても興味深く、ヒントになることばかりでした。メモが追いつかず残念。反復し、実践しながら、また学びを得たいと思います。

・行政、NPOの方々を情報交換できたことも良かったです。新たな人とのつながりでした。

・今日は、色々と気付きと学びになる事がいくつもありました。今後の活動に活かせるようにしたいです。多数決はだいたいつまらないものになる、違った1つも大切。ひきこもりの青年、その母も受けいれる。とても印象的でした。それぞれのNPOの活動が今後ますます活躍できると思います。

・新たな人との出会いと意見を聞かせていただく機会となりました。ありがとうございました。

・基調講演は期待していた通り学びになりました。概念ではなく用い方、視点をいう点で「なるほど」と思える内容でした。地域保健に取り組んでいくにはこのソーシャルキャピタルの考えが必要です。具体的に地域でどう用いていけるかは地域の特性があると思いますが地域の力を信じていくことも大切だと思います。問題解決思考だけでなく、強みが活かせていければ理想だと思えました。亀岡の強みは何でしょうか？このことが住民の認識に浸透するといいなと思います。

・子育て～高齢者支援まで広いテーマの講演をきくことができ、非常に興味深かったです。グループワークでも「子育て」「高齢者」支援を両者とも「横のつながりづくり」が重要では？といった意見が出るなど、勉強になるものでした。

・多世代交流は大切であり、必要であり、近い将来不可欠、見通す力をゆるめてはいけないと思う。課題としないための準備を

・新たな視点の講演はとてもよかったです。難しい点も多々ありました。

・とても良い話が聞けて、良かったです。が、話が長かったので、もう少し交流や意見交換できたらもっと良かったかなと思いました。

・講師の方の実績、分析はさすがだと感心しました。横文字の専門用語での内容が多く難しい部分もあったと思います。もっとNPO法人、行政とのディスカッションできる機会を与えてもらいたいと思います。横のつながりを拡げて協力しあえたら助けあえると思う。

・「あるべき姿」へ向かって、人とのつながりを生かして取りくんでいきたいと思いました。行政、NPOで共有していけるものをふやしていきたいと思います。

・我地域で何ができるか考える機会を得ました、一歩踏み出そうと思います。

・NPOとの連絡、委託できる事業はないかなど考えさせられた。

・人と人とのつながりの大切さ、色々な視点を持った人がつながることでいいものにつながっていく。

・多世代包括的というところで、いろいろな職種立場の方達とお会いできて良かったです。

・多世代、多職種、家庭丸ごと寄りそった支援の大切さを再認識しました。広い視点をもつことが大切です。

メディア掲載

●京都新聞　掲載記事　平成29年12月1日

子育てや高齢者福祉 地域結ぶNPO設立

亀岡

子育て支援や高齢者・障害者福祉の関係者が参加し、意見交換もしたフォーラム（亀岡市余部町・ガレリアかめおか）

妊娠期から子育て、高齢者まで、地域を結ぶことを目指すNPO法人「はぐラボ」が設立され、30日に亀岡市余部町のガレリアかめおかで記念フォーラムが開かれた。行政や子育て、福祉関係者ら約100人が参加し、さまざまな立場から多彩な視点で、協力し合う大切さを確認した。

亀岡市で子育て支援を20年以上にわたって続ける田中美賀子副代表理事や、企業家らが立ち上げた。子育て支援や高齢者・障害者福祉などで、縦割りになりがちな活動のあり方を脱し、横のネットワーク作りを目指す。

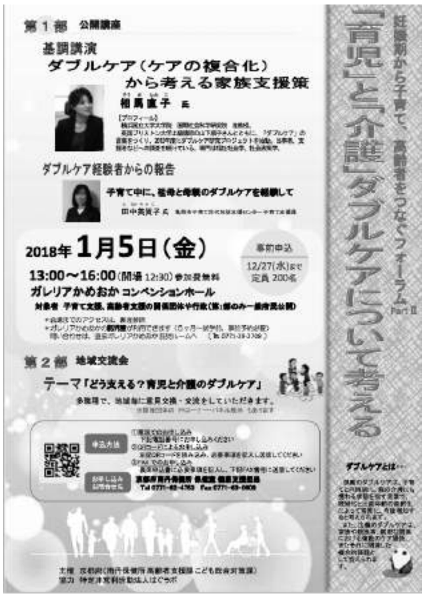
フォーラムでは、異業種が協力し、新たな商品やサービスを生む活動するNPO法人「ミラック」（京都市）の西村勇哉代表が講演した。伝統産業をベビー用品に取り入れた会社や製薬会社が手がけたアイスバーなどを紹介。解決したい課題に対し、「異業種が視点を交換し、感覚を共有することで共に創造する土壌が生まれる」などと強調された。

田中副代表理事は「地域社会で孤立している人は若い世代から高齢者まで多くの世代に渡って見られる。気軽に声を掛け合えるような地域づくりを目指したい」としている。

（藤松奈美）

●フォーラムPartI 告知チラシ（主催）

●フォーラムPartII 告知チラシ（協力）



●ロバスト・ヘルス　webサイト掲載記事

地域で多世代を支える新しいネットワークづくりの試み―京都・亀岡でNPO設立
http://robust-health.jp/article/author/rkumada/000919.php

地域で多世代を支える新しいネットワークづくりの試み―京都・亀岡でNPO設立

WEB独自記事｜2017年12月5日 14:58｜トラックバック（0）

妊産婦や育児中の母親、高齢者まで、様々な悩みを抱えている人たちを地域ぐるみで支えていこうという新しい取り組みが、京都府内で始まっている。

ロハス・メディカル論説委員　熊田梨恵

妊産婦や子育て、高齢者支援など、これまで縦割りに行われてきた支援を横につなぐことで、新しい地域のつながりづくりを目指すNPO法人「はぐラボ」（芦田正吾代表理事）の設立記念フォーラムが11月30日、京都府亀岡市内で開かれ、行政や民間サービス提供者、市民など約100人が参加した。

はぐラボは約20年間子育て支援に関わってきた田中美賀子副代表理事が呼びかけ、企業家や高齢者支援、まちづくりの関係者らが加わって立ち上がった。子育てや高齢者、障害者支援、まちづくりなどの様々な分野について、民間、行政、企業など様々な立場や職種の人たちが横のネットワークをつくることで課題解決を目指す。今後はイベント活動や相談支援事業、政策提言なども行っていく予定。

■働く女性をサポートする企業の工夫

フォーラムでは府内の企業や子育て支援NPO、高齢者支援NPOの活動報告があった。職員の8割が女性という株式会社藤大の藤田大子代表取締役は「家庭と子どものある女性が働くにはそれなりの覚悟が要る。家庭を優先すると職場での責任が持ちにくくなるが、家庭を後回しにすると仕事はうまくいかなくなる」と、家庭を持つ女性が働き続けることの難しさを強調。その上で、藤大では子どもの学校や地域での行事がある時期には前もって職員の間で協力し合って対応できるように調整するなど、様々な工夫をしていると話した。就職面接では『職場を優先するように』と伝え、組織人としての自覚を促していると述べた。

■分野別支援から多世代支援へ

NPO法人からは、元々は子育てや高齢者と分野の別れている支援が、活動を続けているうちに様々な地域や社会の課題を任されたり、多世代・他業種と関わるようになっていった例が報告された。子育て支援のNPO法人「グローアップ」の広田ゆかり副代表は、母親同士の学びの場から始まった活動が、自治体からの委託を受けた子育て広場の事業に発展し、今では地域の誰もが集える場を開いたり、地域情報冊子をつくったりと、地域や世代間の交流につながる事業を展開していると話した。介護保険事業などを行うNPO法人「クローバー・サービス」の荒牧敦子理事長は、自主事業として行っている空き家を活用したカフェが、引きこもりだった若者の段階的就労の場になっていることを紹介した。

田中副代表理事は「例えば子育てなら、『子育ての社会化』と言われているが関心のある人は一部で、やはり個人の問題として捉えられがち。もっと社会化していくには、様々な業種や分野の人たちと関わる時期に来ていると思う。子育て支援や高齢者支援など行政の施策は縦割りになっていて、NPOの活動も同じ。新しい場を作ったり、建物を建てたりしなくても使える資源をお互いに共有でき、実現できることがあるはず。亀岡は広いので、小学校区ぐらいのエリアで住民が支え合っていけるようなつながりづくりや、そういう仕掛けをしていきたい」と話した。

次回は2月に子育て支援に関する講演会が行われる予定。

◆政策的背景からこのイベントを読み解いてみる

このイベントだけを見ると、多世代支援の一つと感じるかもしれないが、厚労省で進む政策を見るとその流れにあるものという見方もできる。

■高齢者施策から見る

今、各自治体では2025年の地域包括ケアシステム構築に向けた体制整備を進めている。その中で、2015年度から各自治体で①介護予防・日常生活支援総合事業②生活支援体制整備事業③在宅医療・介護連携推進事業④認知症総合支援事業―の４つの事業が始まっている。
①については、介護保険で提供されていた要支援者向けサービスが今年度から市町村事業に切り替わっており、「総合事業」と呼ばれている。様々なニュースで見聞きしている人もいるだろう。
②生活支援体制整備事業では、地域の資源開発やネットワーク構築などを担う「生活支援コーディネーター」を配置するとしている。また、様々な関係機関が情報共有や連携していくための「協議体」の設置も挙げられている。

■子育て施策から見る

今年度から子育て世代包括支援センターの全国展開が始まっている。妊娠期から子育てまで「切れ目のない支援」を提供することが目的で、産前産後サポートや産後ケア事業が行われる。自治体によってかなり状況が異なるが、高齢者の地域包括支援センターの子育て版とも言えるだろう。妊産婦や育児中の母親などからの相談やケアに関するワンストップ相談窓口になることが想定されている。

■福祉施策から見る

制度の狭間から漏れてしまう人たちを支えるための「地域の福祉サービスにかかる新たなシステムの構築」として「包括的な相談システムの構築」が始まっている。つまり、あらゆることのワンストップ相談。下の図を参照。

図1-1 包括的な相談支援システムの構築

これらを見るだけでも分かるように、国が主導する方法では実情の異なる地域の様々な課題を解決できなくなっており、各地域の自主的な取り組みに任せる予算の付け方が増えてきている。地域包括ケアはその最大の例だろう。以前の厚労省の資料では「地域の力の活用」や「連携」といった言葉が目立ったが、今では「包括的」「多様」といった文字をよく見かける。社会や地域全体を支えていくために、様々な立場の人たちを巻き込んでの地域独自の取り組みが求められている時代に入ってきたのだ。はぐラボの行うネットワークづくりは「協議体」や「包括的な相談システム」づくりやそのきっかけとも捉えることができ、そうした動きが民間から出てきたのも時代の流れの一つと言えるかもしれない。

地域包括ケアについては、書籍「地域包括ケアの課題と未来」をぜひどうぞ。地域には様々な課題があるが、共通して抱えている問題が著名執筆陣によって列挙されている。また、はぐラボでも話題に上がったダブルケアに関連するが、書籍では在宅介護をする家族の経済的負担の大きさをデータをもって主張している。筆者も最初に読んだときは衝撃を受けた内容なので、在宅医療介護や地域包括ケアに関わる方々はぜひご覧頂きたい。「介護は家族で、の国策が日本の未来を暗くする」（ロハス・メディカル2014年10月号）

Hagulabo
特定非営利活動法人 はぐラボ

平成30年3月発行